

金松  
壽司  
下  
卷

名廣澤  
第三編  
中之巻

梅雪  
後名  
梅雪  
之巻

辰乃  
卷



山  
辰乃喜  
新板

与  
卷

橋名垣喜久松院

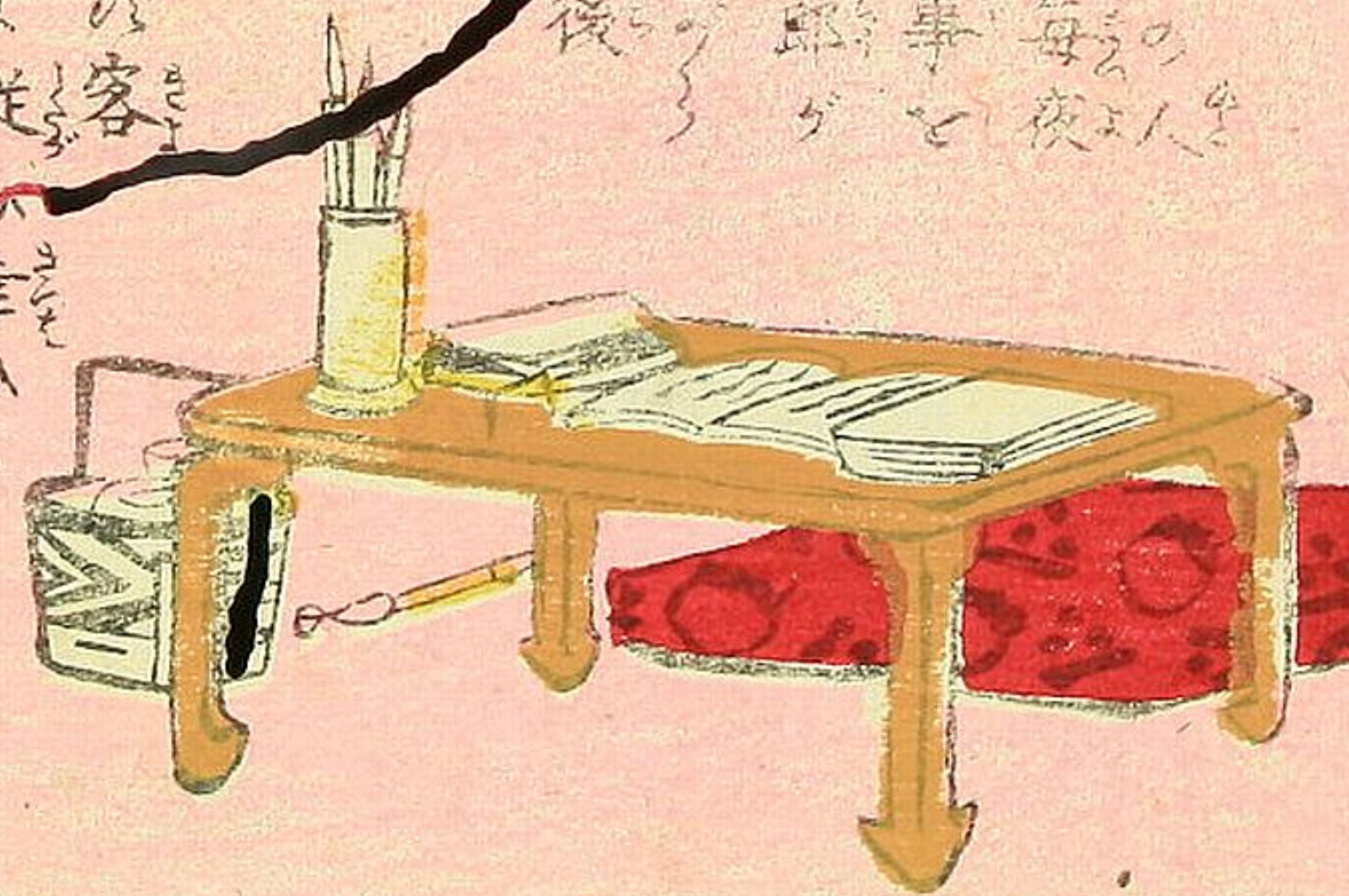
10

15

20

25

名廣澤邊萍第三編之序  
 在下前年筑紫遊び久留米の  
 渡邊慎平氏と交誼を深く毎夜  
 旅泊に来りて燈臺の下に世事を  
 談ぜりが偶々當地の板垣太郎が  
 傳を聞き國を許さぬ祀人なる  
 其義氣勇膽よ一感せし其後  
 在下京坂に在りて新聞記者  
 の末より列り太郎が小傳を  
 綴らんと山陰葉山子氏  
 年來此地を遊び魯翁が驥尾は從ひ幸ひ



操觚の職よりまは太郎傳と稿せんともる際硯友  
 京文舎文京氏が明治の大樹廣澤の事實を綴らんと  
 目論見ありて在下起稿と委ねし例の如き筆自在の  
 妙案魯翁が校閲刺ありと初編二編の大評判版元が藏  
 入よくまは三編の発兌も魯翁が繁き机と察せむ  
 序文の督促子僧のか千度も片言の野暮な口で序文なと  
 何をましくも在下出る幕ありぬど看客のか待ち兼鬼  
 も角三編丈け出しぬけし序文と填る即席葉渡邊氏  
 うら聞出してまは渡邊の文京氏が稿と起まも妙選字  
 性とぶつつけ書きて序詞を換る

いろは新聞

明治十三年第三月

彩霞園柳香誌



浪人 山口甚太郎  
沼津 使者 若松惣助



名廣澤邊萍三編之上

東京

假名垣魯文校閱  
京文舎文京著述

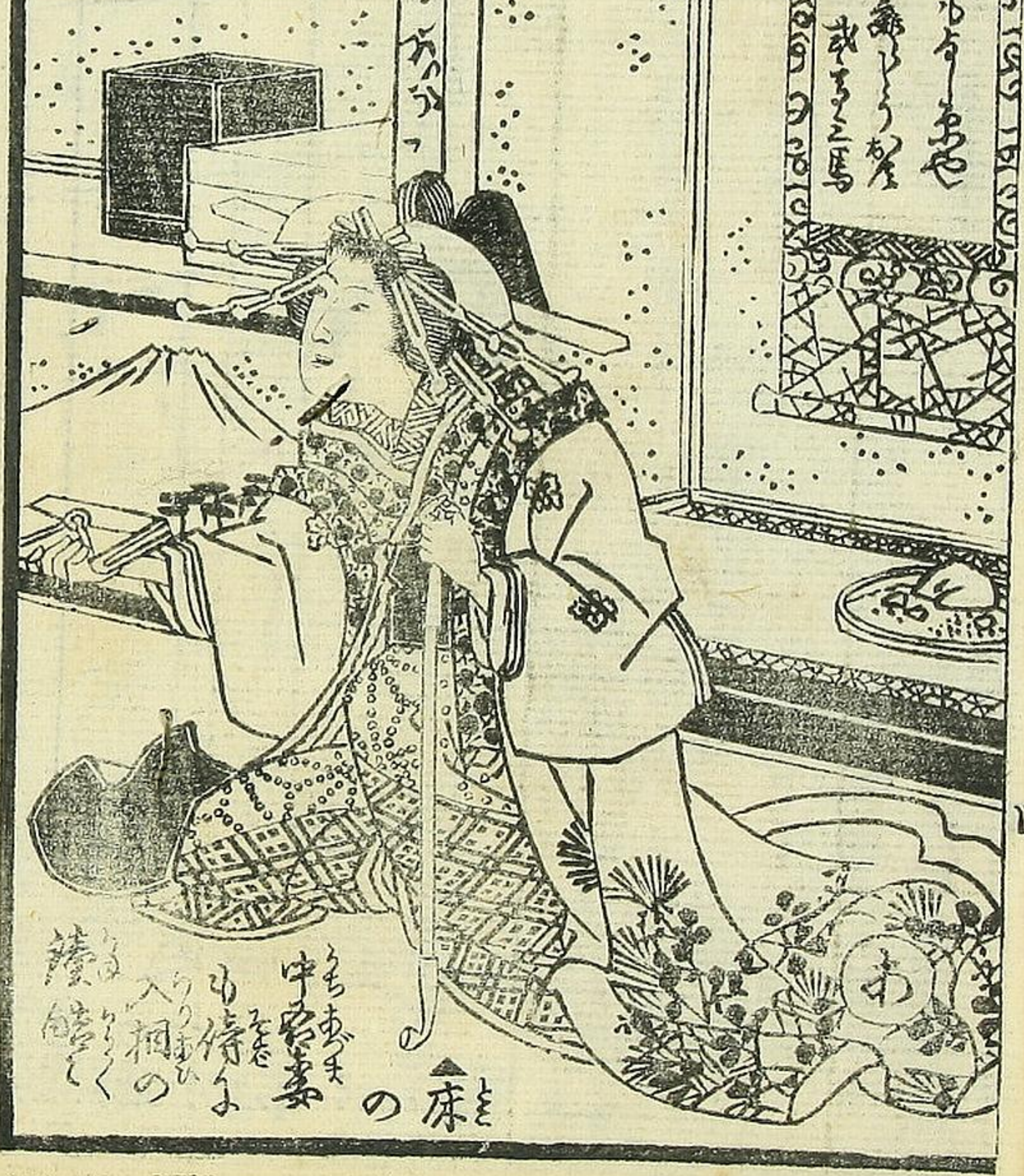
第六回 壮士の決心故国を去る

遙く小倉海を空め、  
港灣を眺むるに、  
貿易の利潤を占め、  
肥前長崎の港  
を表すおぼるる、  
一層賑ふ其よ、  
洋景を未だ、



作樂よまじし 迷ふもやまら  
あつてまじりては 舞ひしうた  
あまのこ

つま  
士々 性若く  
身ご せき  
空を 妙  
さうり 々々  
今月 矢気  
飛来 不花  
この 肌合  
蝶飛 不暇

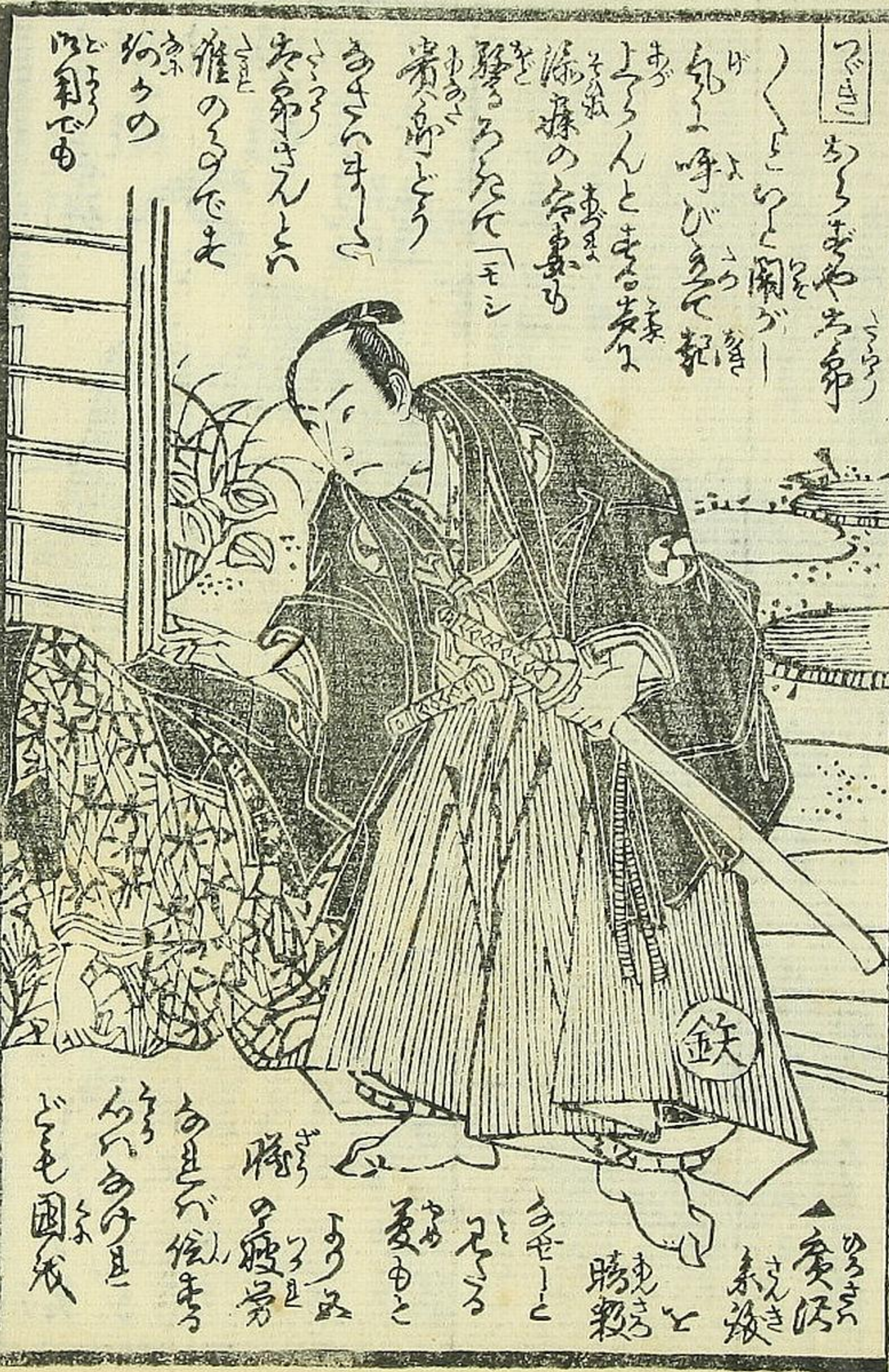


中 寄 奉  
ゆ 侍 小  
入 相 の  
續 儲 へ



さうさ 定 宿  
酒 の 後  
念 一  
仲 を 着  
者 あり せん と  
二 人 の 氣 取  
と ち だ だ 弾 出  
之 法 の 善 果 城 大 名  
定 命 あり けり  
碎 よ その 怪 物  
森 の 風 吹 けり  
と 雛 妓 が 泣 けり  
健 あり

と 若  
は けり  
法 師  
評 定  
の 寄  
き ぬ  
雅 び 及  
破 らん  
零 所 あり  
我 破 と  
別 あり  
を 寄



つぎ ちうまやち糸  
 くさくすと開が  
 けい 呼びまて報  
 よろんとまをる  
 漆の命まも  
 髪をたて「モシ  
 貴高どう  
 あまのま  
 名弟さん  
 雁のひをま  
 けうの  
 吐利でも

▲後活  
 未後  
 勝毅  
 せと  
 ちせと  
 せう  
 貴高と  
 ありぬ  
 勝 屋敷  
 あまのひま  
 ちも國成



ごまの  
 ままの  
 「備の  
 今の  
 養あり  
 一辺ご  
 激流にふかり  
 食ともま  
 野 壘の  
 我が相  
 ところま  
 國家の柱

あまのひま  
 ちも國成  
 ちせと  
 せう  
 貴高と  
 ありぬ  
 勝 屋敷  
 あまのひま  
 ちも國成  
 ちせと  
 せう  
 貴高と  
 ありぬ  
 勝 屋敷  
 あまのひま  
 ちも國成







つまき 出港せしめ  
 の速い  
 け方  
 先刻の  
 夏見  
 とらひ  
 かんぐ  
 関利ふ

今一とびつて今日  
 出港せしめ  
 候親まる  
 ぬ國の  
 大に  
 訂起せ  
 その外  
 あらま  
 と見え  
 めんと  
 懐中



関係  
 らんと  
 を赤  
 引之契  
 先刻の  
 夏見  
 とらひ  
 かんぐ  
 関利ふ

鐵  
 海地  
 舟  
 火巻  
 の用  
 船  
 大  
 東家  
 友人  
 本常  
 送  
 便  
 出

# 旅人宿

## 真誠講



つぎ  
 旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講

旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講

旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講

旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講

旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講



旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講

旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講

旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講

旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講

旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講

旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講  
 旅人宿  
 真誠講

つき 幸あり 先年外國人  
を教はるる 東京赤羽根の

山に玉ふを存が

政府の探偵

蔵あるより他と

客の地あくと

中村六蔵周傍

赤羽西人は依

中村が同屋

のうへ赤羽根と

並ぶ一六日地の▲

△ ちき 長崎港 遠景

より 云報せーが

その後お松

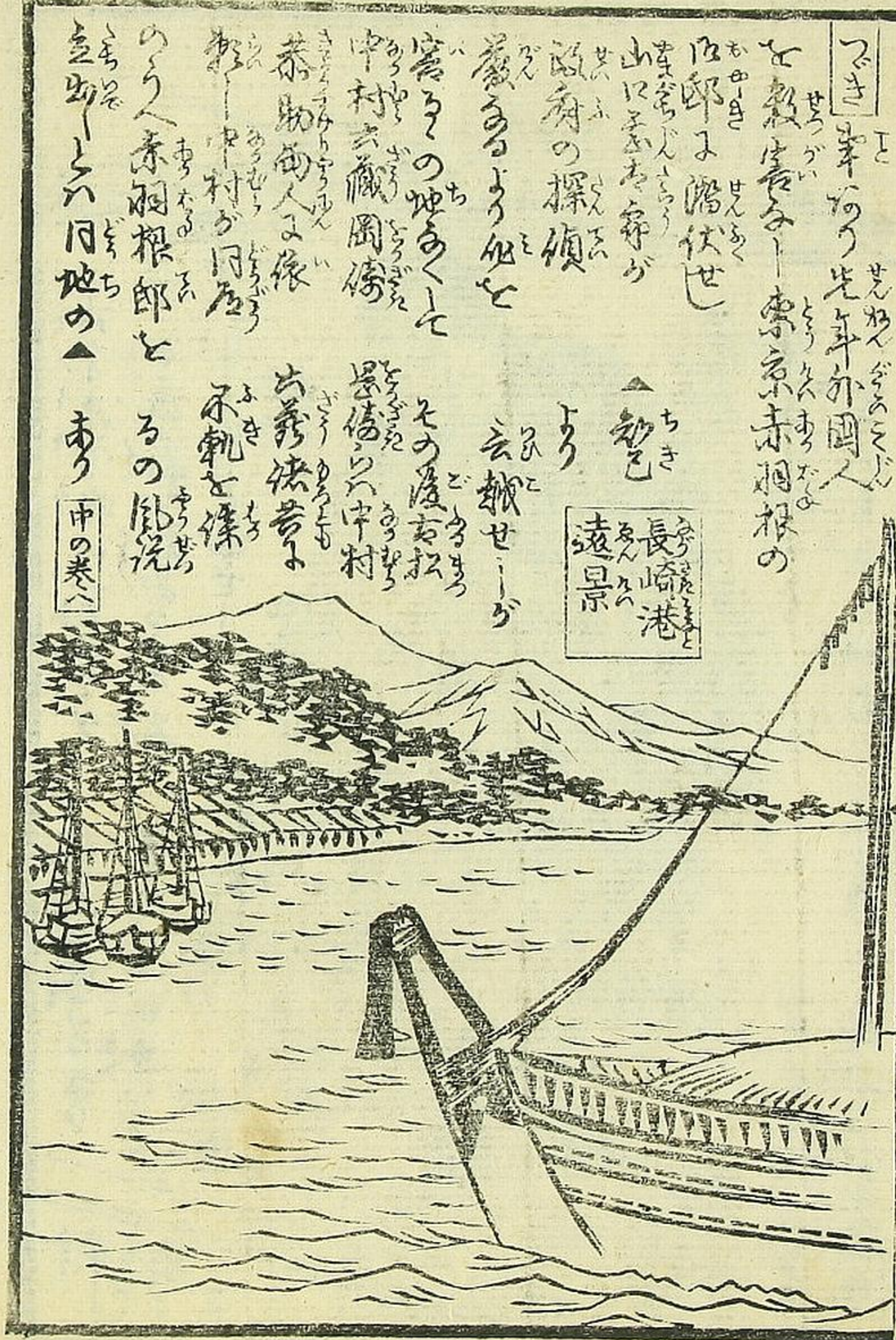
墨傍の六中村

六義法考の

不軌を係

るの風況

あり 中の巻へ



橋岡編 銅版開化七編 全 開化女用文章 全

近世紅 蘭 一編 夜風阿鬼奴花の夢 全

同編 義烈回天百首 全 金花七變化 全

用支 漢語 伊呂波字 全 駕衣女鳴神 全

支 錦繪問屋

金松堂 出板 湖八 物

010190512075





名廣澤邊  
第三編  
中之巻

梅雪之山

10

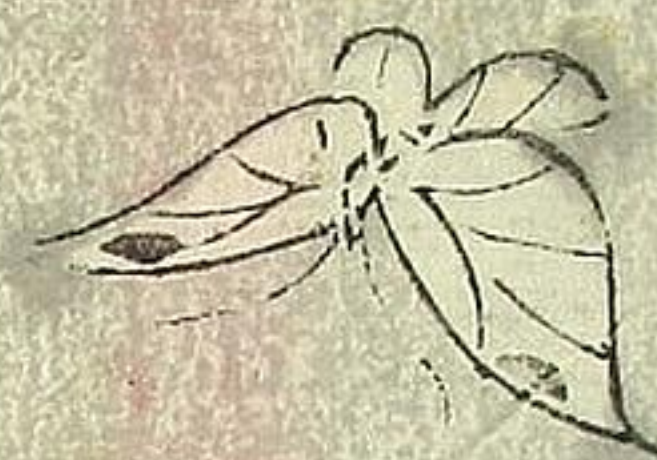
15

20

25

A487

↑



名廣

之編

中

澤邊

卷

魯文校閱  
文系著述  
國政惠圖

金松堂梓



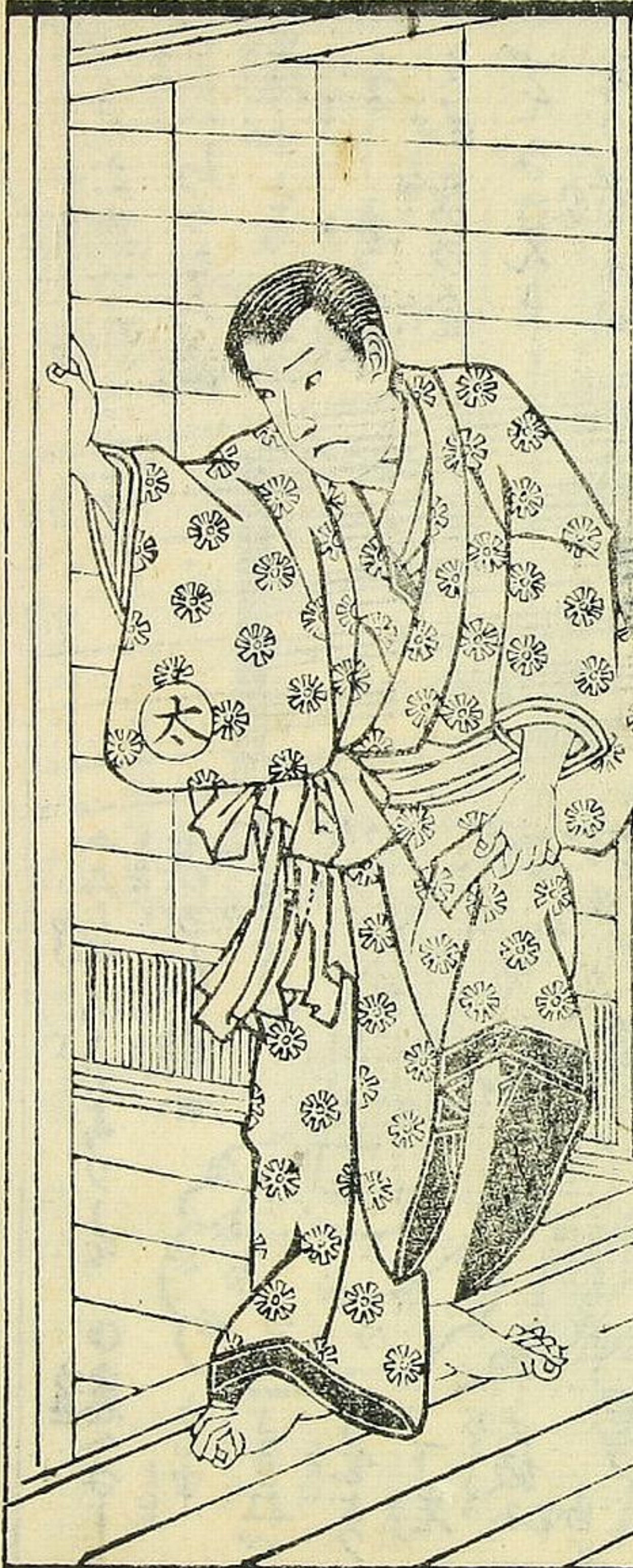
<48-8293>

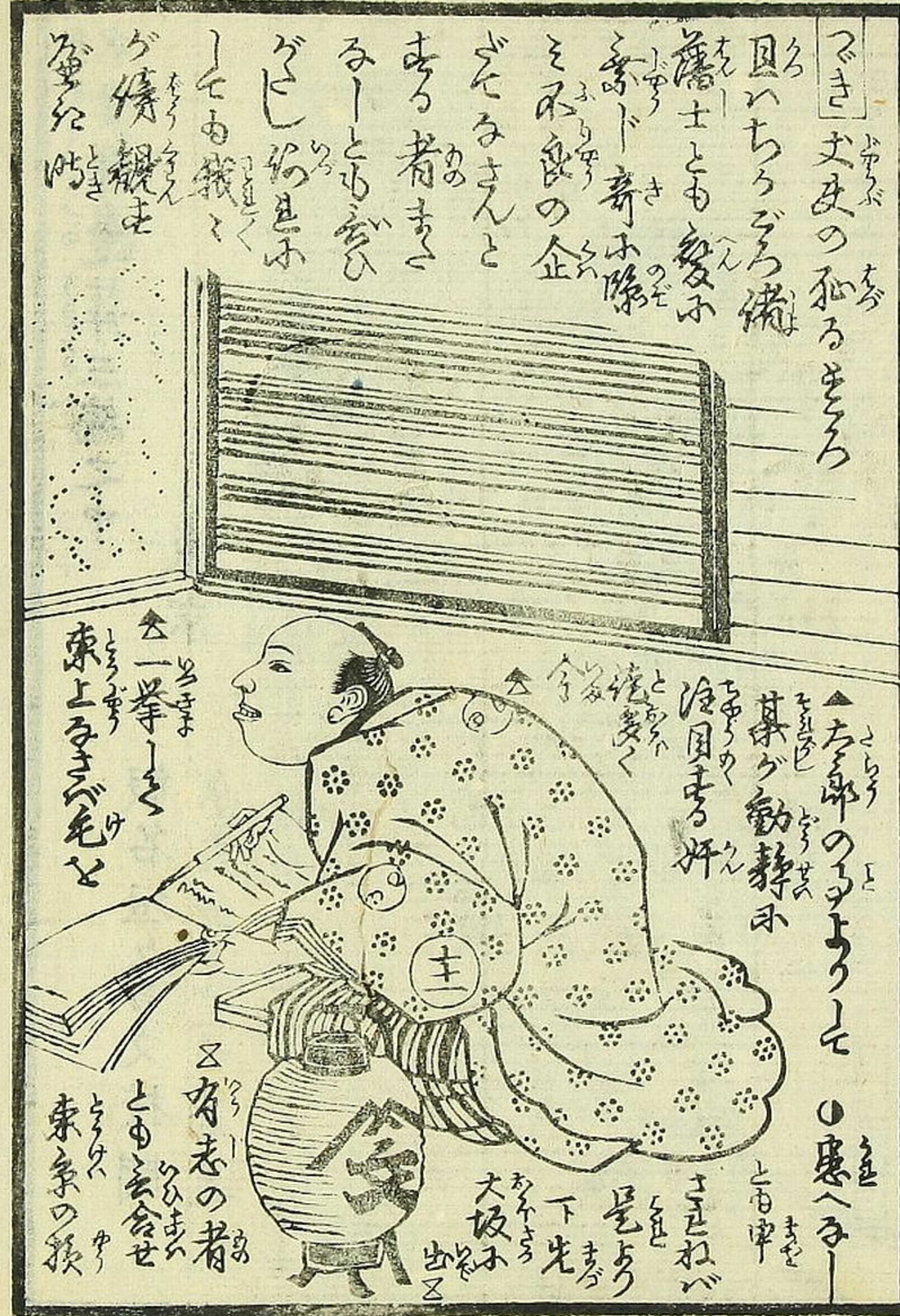
名廣澤邊萍三編之中

東京

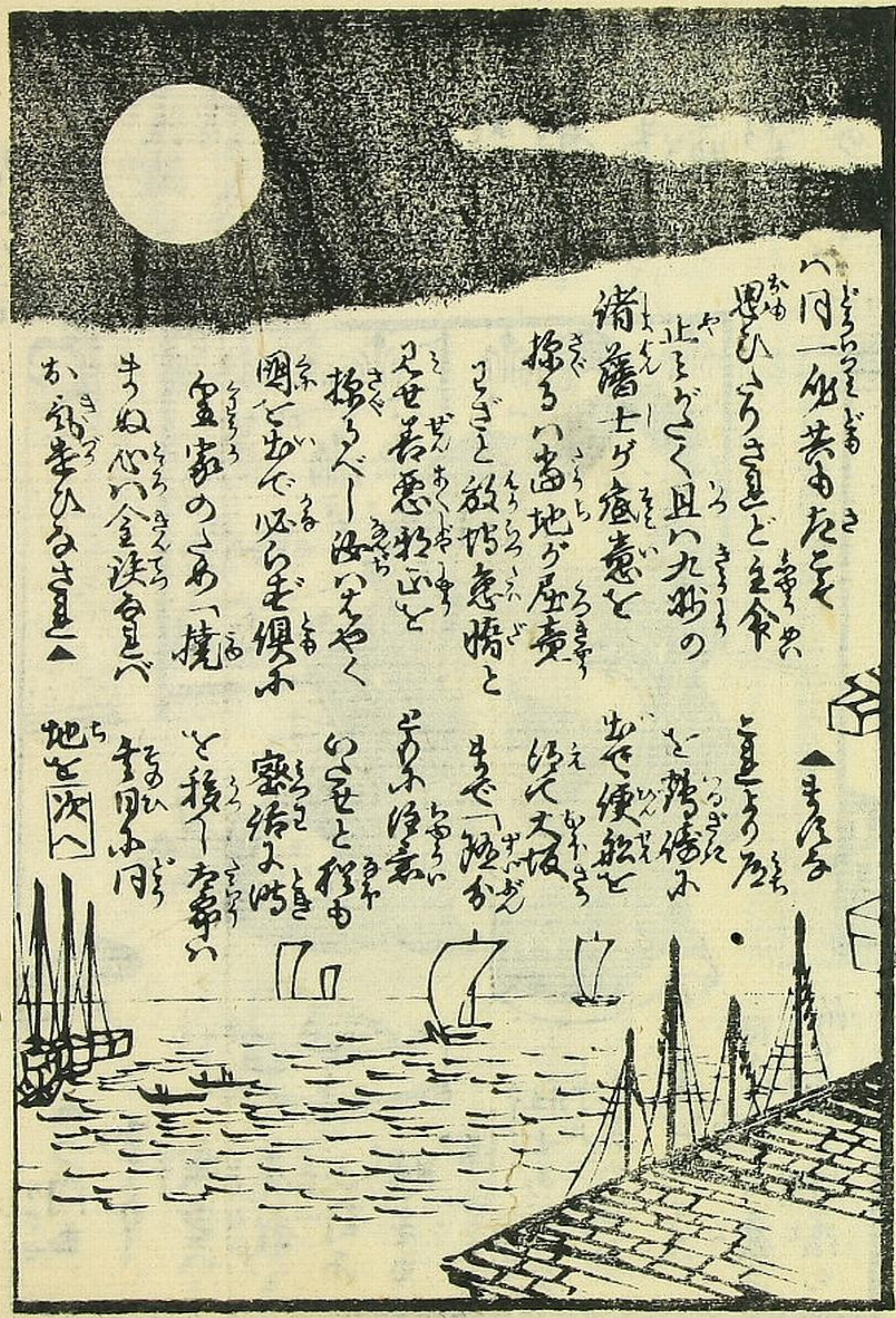
假名垣魯文校閱  
京文舎文京著述

上之卷ヨリ續ク  
善や糸織と晴殺せしハ波等の為業よりさる  
う維新以来  
濃きよ高路の人と晴殺るぞと元より  
次へ









一月一必其由たそ  
 思ひ入りはとと全  
 止まらなく且九妙の  
 諸藩士が意と  
 探るい富地が屋敷  
 ことごと放物意情と  
 是世若悪物いと  
 探るい富地が屋敷  
 國と必ら必ら俱不  
 皇家のよあ一境  
 まぬ心金法を是へ  
 かたきひるまは

地と次  
 密治よ時  
 と後一帯の  
 手回し  
 密治よ時  
 と後一帯の  
 手回し



急も急  
 下先出  
 團ま  
 某か

一雨存也  
 此中か許  
 一雨存也  
 やり懸く出港い  
 志とまら一雨とを  
 海方待長と金ま下存

廣沙三

つきまぢ  
豊後治はじ  
ておきまろし  
去る者いれ  
と擇まむれ  
たる者へ食  
と擇まむれ  
き者へ衣  
と擇まむれ  
時と勢  
人情走て  
かくの如



の門  
成る  
屍骸  
山野  
曝まゆ  
帰らんと  
壮士の本文  
土まの縄  
康とさ  
月歩を疾  
仰り頓て豊後の

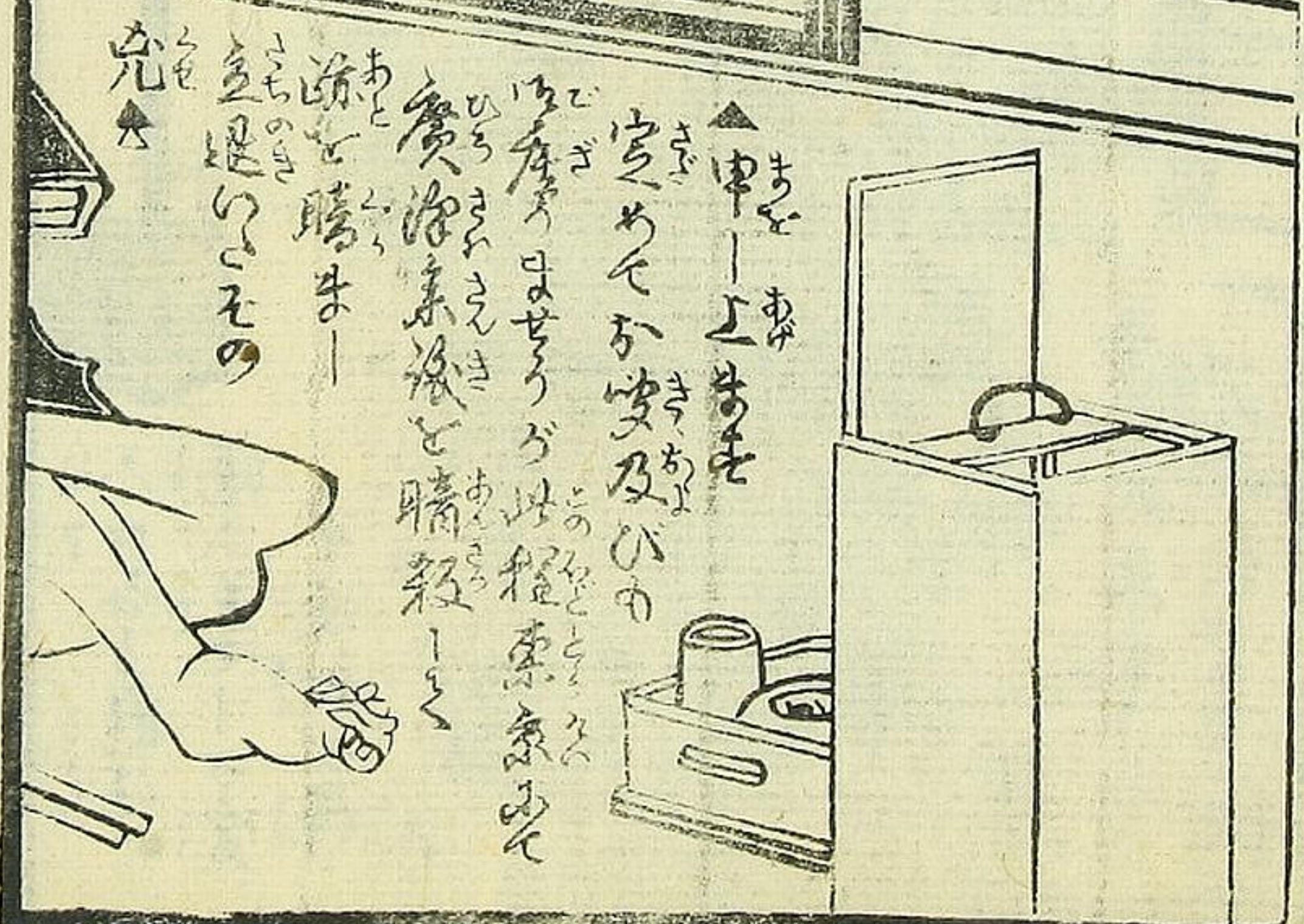
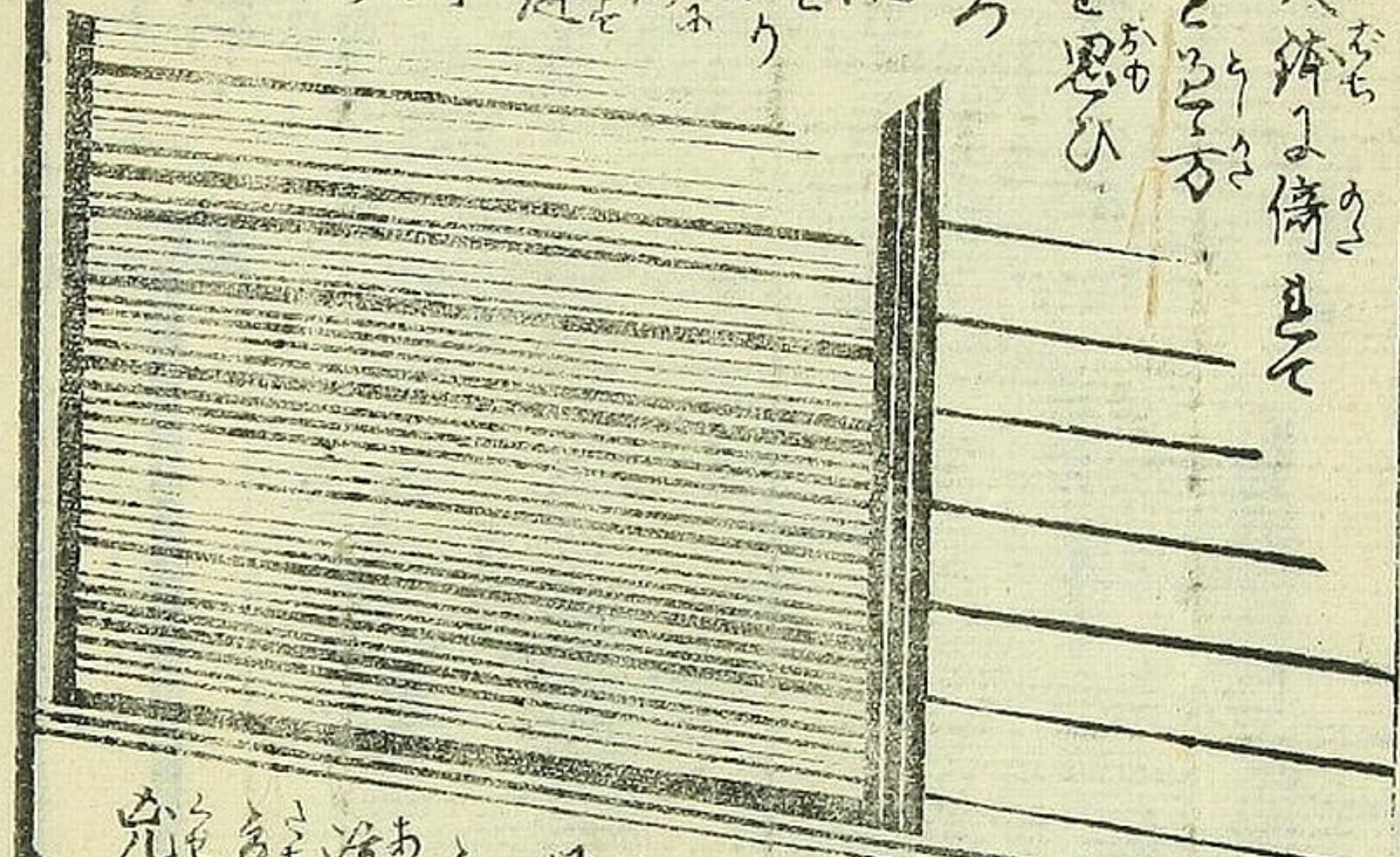
さら程小  
板垣を帯  
父鉄之助  
順と告げ  
別上統  
の空と跡  
見之國  
動静と探  
と断然志  
一途不決  
旅の故郷  
飾る錦の



入口ある  
港ふさ  
舟便船と  
旅の二階  
一人は  
次へ

つま 大納言侍 且そ  
歎然と云ふ方  
将来と思ひ  
つせまろ

不感懐  
の懐紀り  
寄心何  
穿う 練  
不忌  
解く 柳  
胸の  
胸の

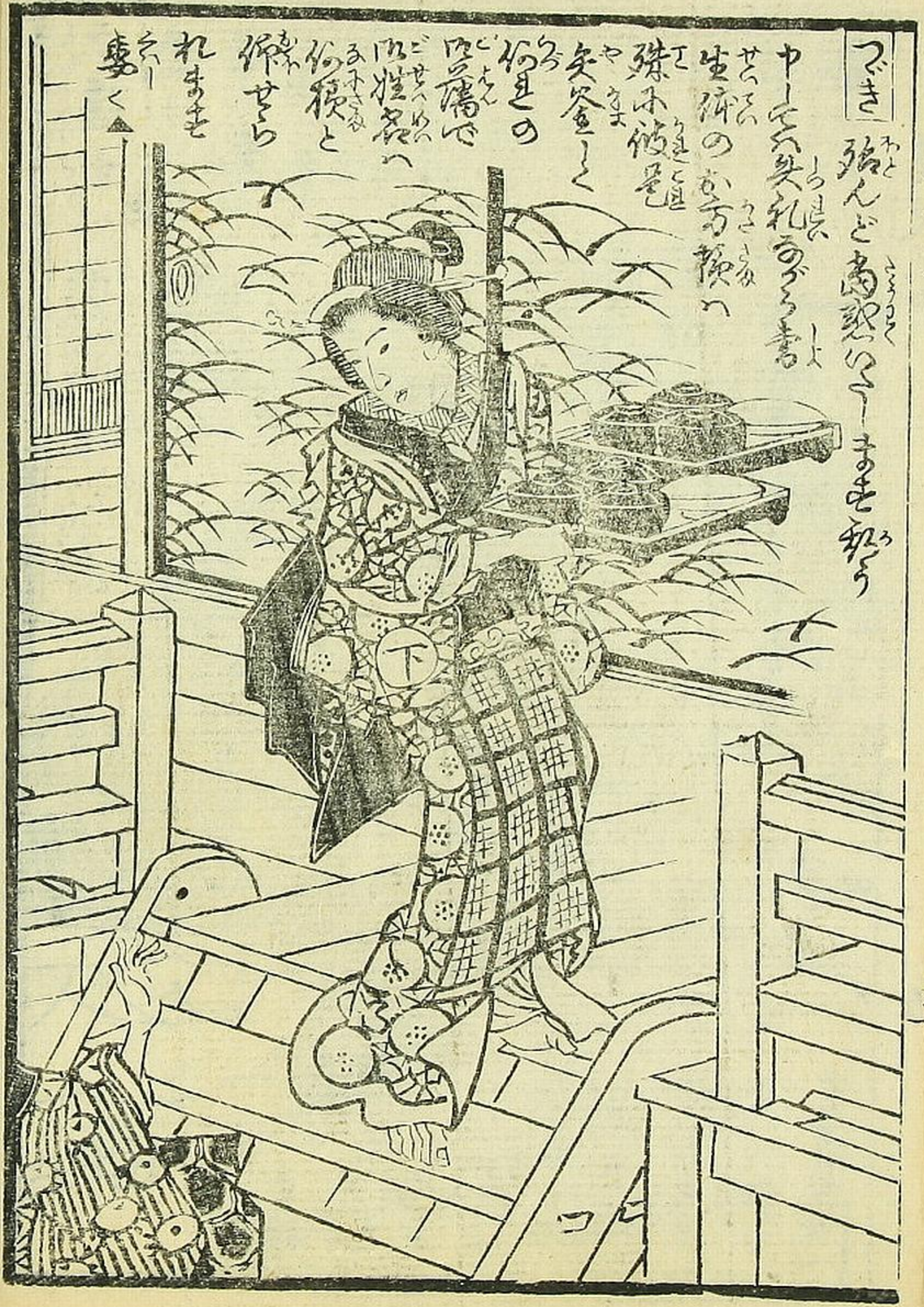


申上り  
宣めそ不安及びの  
いふはせうが此程  
廣海を渡りて  
断を断ま  
是退りてその  
穴

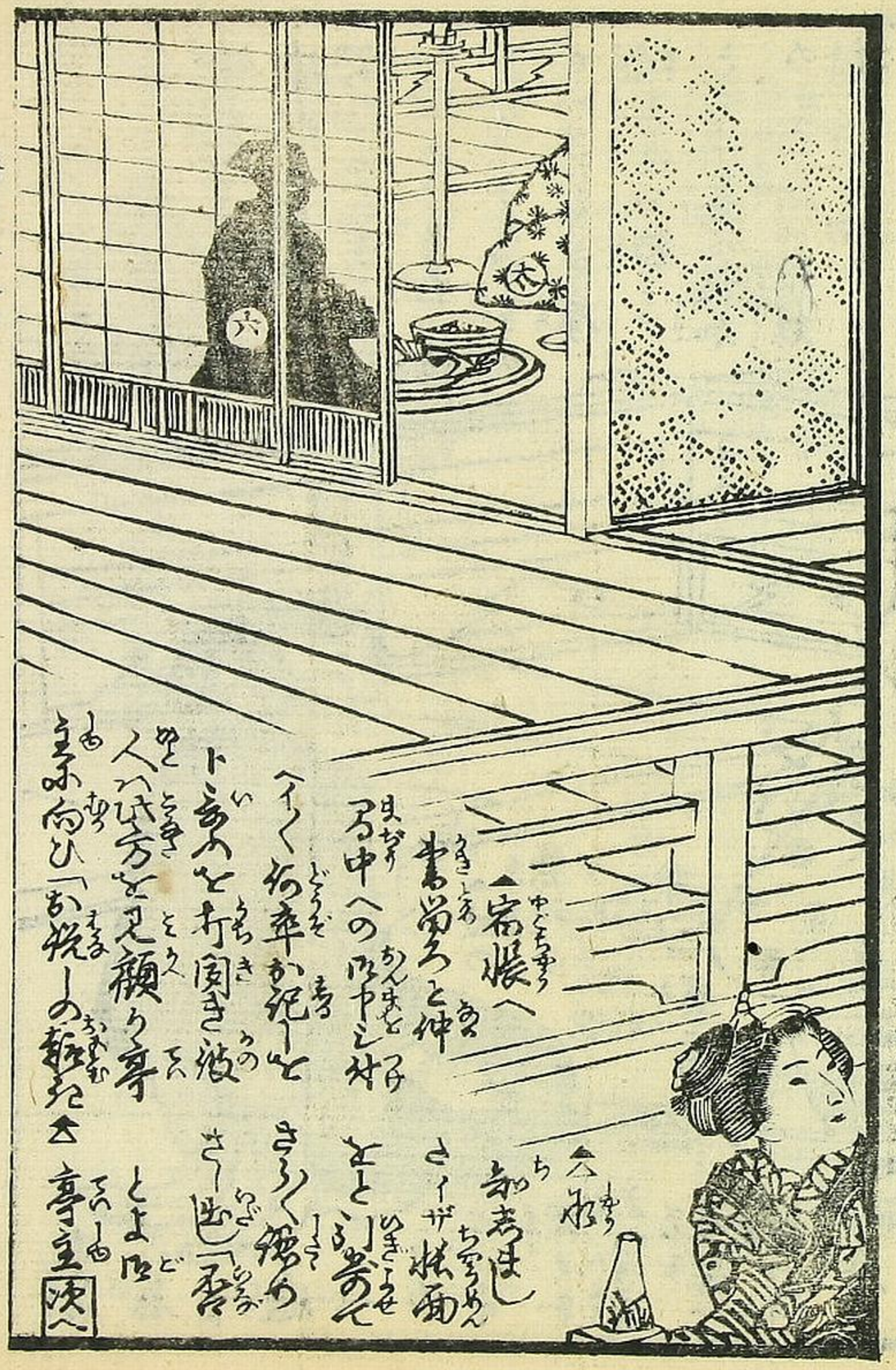


中隠  
爰小止宿  
まら見ゆ  
一個の書  
生体物  
書見と  
しに存  
知へ宿  
屋の亭  
主入り  
来りお  
案按へ

云渡  
の源  
流を  
断を  
断ま  
分ての  
幕しん  
後を直不  
付て新  
どもまで次へ



つき 強んども高懸のうへまきなり  
 中へお灸礼ある書  
 生研のむ方換  
 殊小彼を  
 矢欠をく  
 何是の  
 空腐心  
 内性名  
 何様と  
 作せら  
 れたま  
 妻く



宿帳へ  
 中へお灸礼ある書  
 生研のむ方換  
 殊小彼を  
 矢欠をく  
 何是の  
 空腐心  
 内性名  
 何様と  
 作せら  
 れたま  
 妻く

つぎ 介を伴うが係  
 さきと一廣沢系係と  
 晴殺せしと究極を  
 捕縛んと殺す  
 檢査せしとと  
 如何ある多寡う  
 まり一さきと  
 せとせりまうを廣  
 沢系係と殺す  
 とと捕縛と殺す  
 のお死衛の究極  
 様の番と牽くと



△客  
 易の道  
 るべ  
 くも  
 りん  
 早く  
 上の用  
 兵衛  
 ぬで  
 彦

質候とかうぬ  
 大強動のをも  
 山境の九物地方へ  
 逃込と飛  
 のととくせ  
 の九物地方  
 控受る地と  
 へもて往候も  
 余もよと殺す  
 かく殺せるな  
 破りるは天を  
 翔り地を渡す



△客  
 易の道  
 るべ  
 くも  
 りん  
 早く  
 上の用  
 兵衛  
 ぬで  
 彦

つま 網を思ひま  
 由ハツタリもま勝  
 の上ゆら顔つふ  
 抽葉ト漏息吐  
 て居さうける  
 直すまいの気  
 め付まき高き橋の  
 照返に二まへま  
 さう私こしこみ  
 ぐ大まき不流しふ  
 突ぐ入そりらむ  
 長空をのこ



△おま入おの種て是候ハ  
 ちまぐら  
 由今多  
 途方ふ  
 茶ま  
 かる  
 寂滅  
 為樂  
 の寫  
 き  
 全明

まーこまご  
 且勝ふ由  
 退屈ト他の  
 おは後へと宿帳  
 とお上げ投きんて  
 「たれかまき申す  
 怨平の平氏申  
 村を説と訴ま争い  
 まるせうの信後りとお供とま  
 さまさせト障ふを切り  
 尻踏ふ足むと  
 あらくくまてゆく△



△お小  
 六巻腕又ぬた  
 とお袖と撞△  
 の後と  
 や破る  
 らん屋ハ  
 何と  
 せん  
 免や  
 せん  
 心ツ  
 小千花  
 縷  
 万情  
 つま



お恨を宿るは 耳を聞くと 不ふ 活くわくの 小こ三さんは

作しやう一いつ小こ笑わらく  
中なかつ村むら六むつ花はな

性しやう疎そ 者ものの  
果はの 激げき流りゅう中ちゆう  
其その上うへに 毎まい日にち

了りやう 係けい首くび金かねと 金かねを 不ふ入いて 一いつ粒つぶの 時ときを



燈とう火か 極ごく盛せい石せき  
小こ三さんは

つぎ ちひ余あまて  
然しかん然ぜんと 夫つまと  
暇ひまんで 歎なげ息いき  
まけ 万まんの

子こ六むつ中ちゆう村むら  
六むつ花はなと  
小こ三さんは

廿にじゅう一いち日にち 係けい首くび金かね

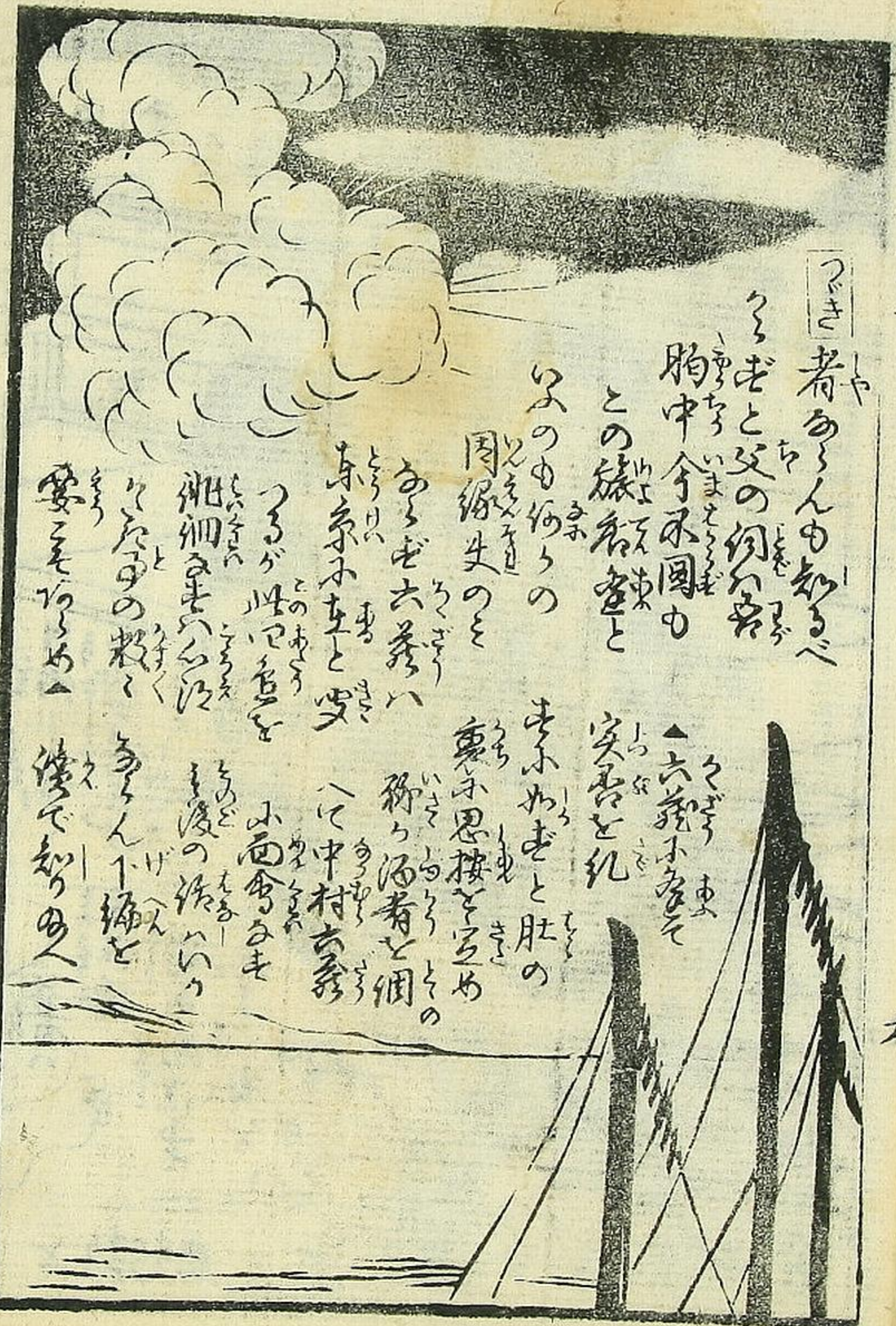
激げき烈りやくの  
数かずの

今いまと 家いえの  
後あとに 変かへり  
入いる

月つき三さん中ちゆう

作しやう

廣瀨



つぎ 者あらんゆ知るべ  
 ると父の何れか  
 胸中今不國の  
 この旅香を  
 どのゆ何りの  
 周縁生の  
 あらざ六義ハ  
 未系小と安  
 つるが此の  
 細細るまの  
 くら中の  
 要そつらめ  
 六義小を  
 実吾と乳  
 未小れと肚の  
 裏小思按を  
 孫ら酒者と細  
 へ中村の  
 小舎を  
 後の活い  
 多ん下編と  
 後ぞ知らめ

橋 編輯  
 銅 版 開 化 七 編  
 開 化 女 用 文 章 全

近 世 紅 蘭 一 編 出版  
 復 風 何 鬼 狂 花 夜 夢 五 編

義 烈 佃 天 百 首 七 編 出版  
 金 花 七 變 化 七 編 出版

漢 語 伊 呂 波 字 引 全 編 出版  
 馬 衣 女 鳴 神 七 編 出版

笑 錦 繪 問 屋 全 編 出版  
 金 松 堂 出 版 人 辻 問 文 幼

010190512083







10

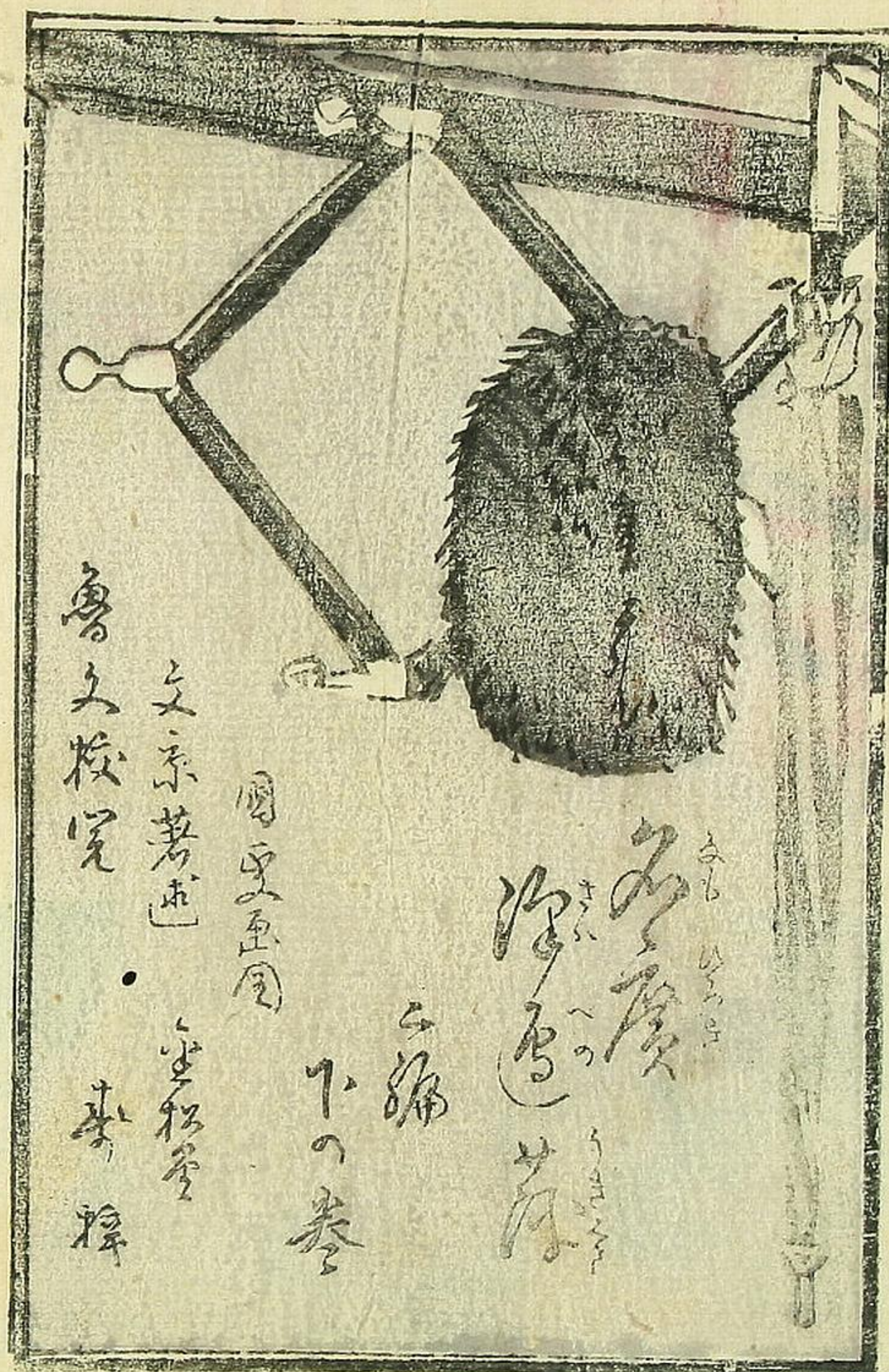
15

20

25

30

A407  
9c.



名廣澤邊萍三編之下

國文堂

文系著述

魯文校完

葉

下の巻

48-8299

名廣澤邊萍三編之下

東京

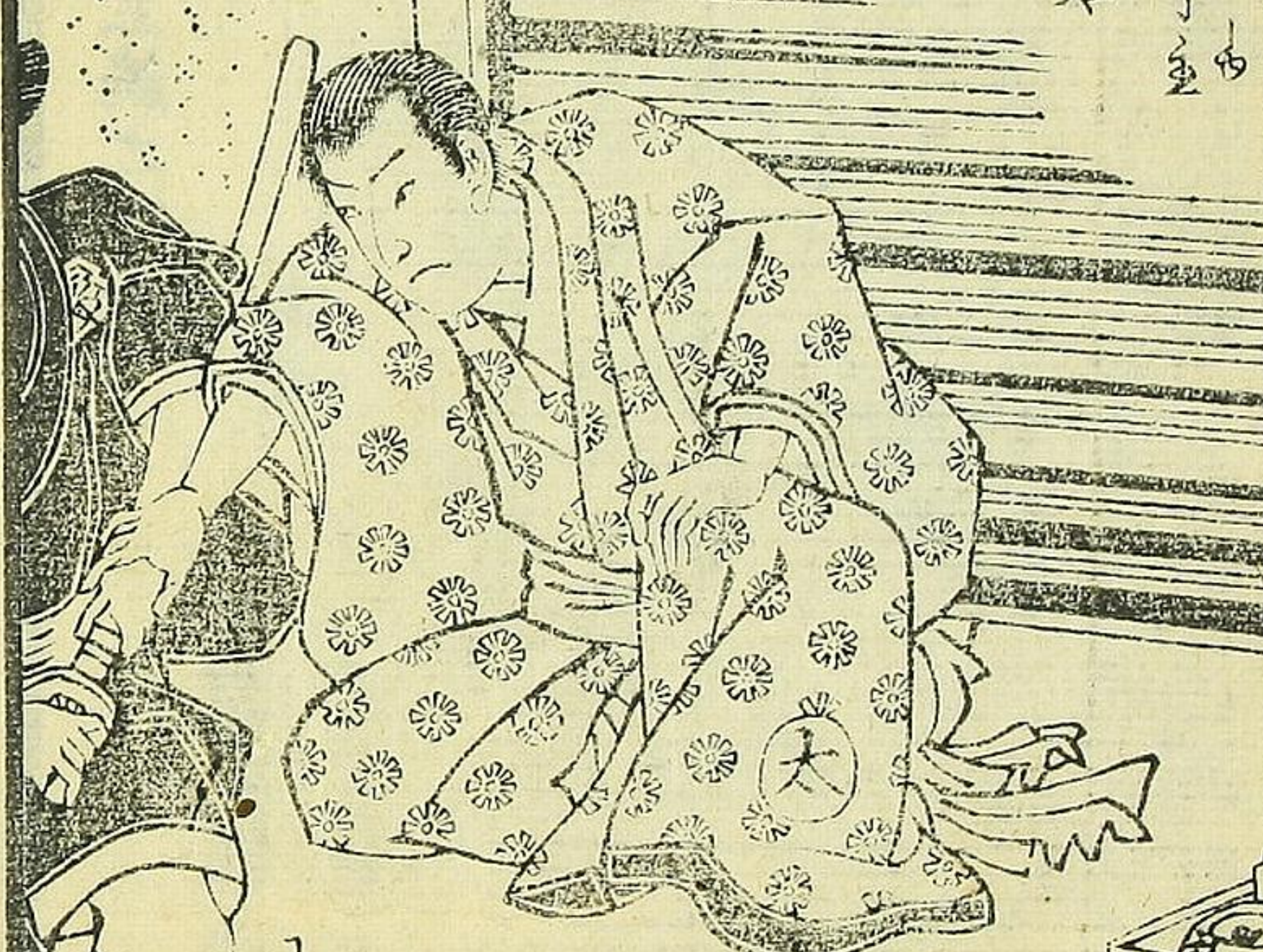
假名垣魯文校關  
京文舎文京著述

第七回 壯士不図るく助を得

妻の夜の憂をうせあるを枕は既性以來を思ひ身を  
流石剛石の大藏心思按は舞ぐる聯のうら下向の  
後か一開けと入来るまの家の下牌が「モシ且那ま  
隣り空後のか密指が貴郎さま人か同よをり度  
が此方へか出らさまはる私一うら出ませうら  
承つて来いとのもてでざりまはと綱よ去我不需  
なまを突然我よ面會せんとい心得がた事よ

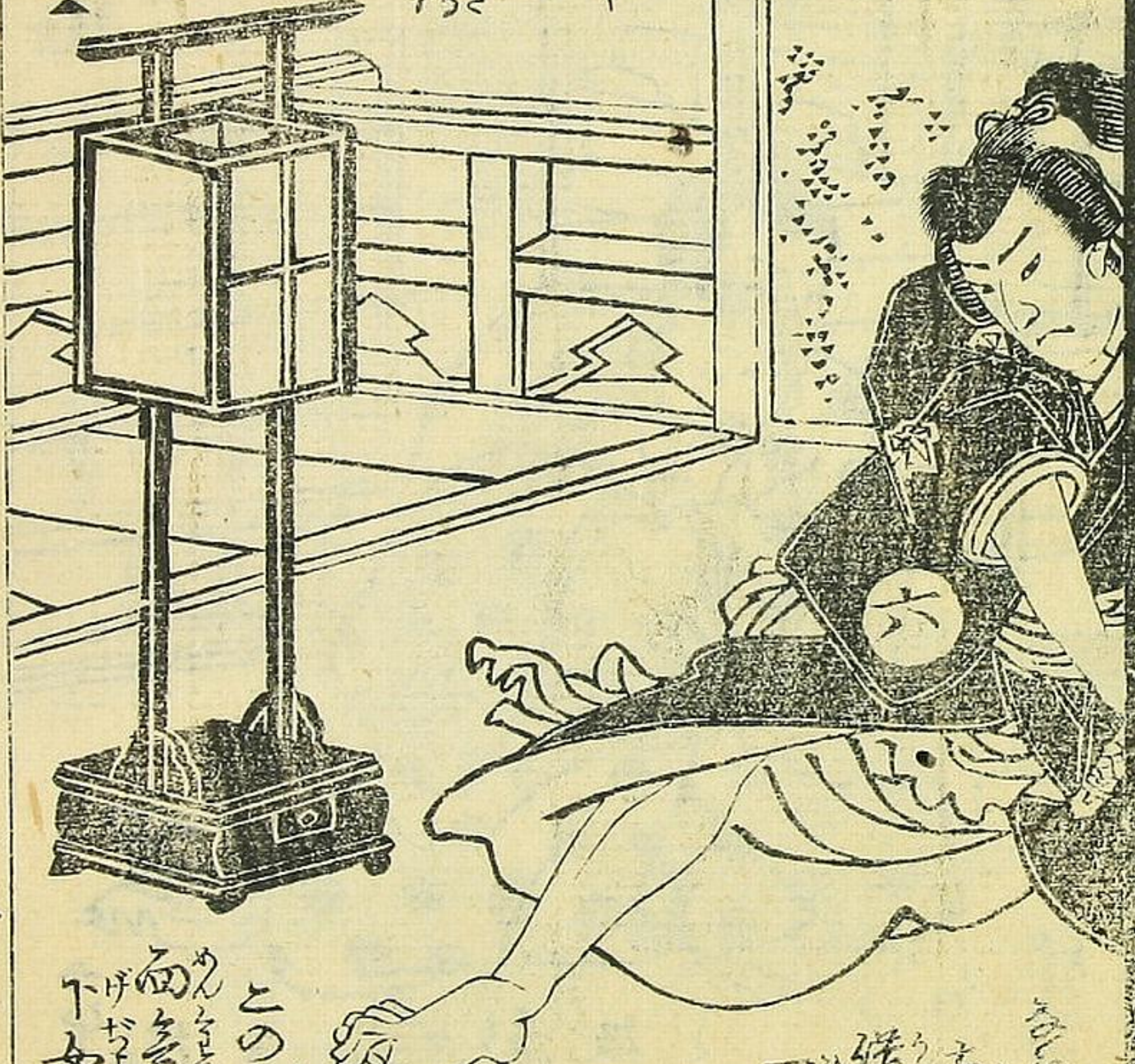
黄文堂

つきろを先刻亭主  
 が煙と云ひりや  
 弾正後の官使  
 ありまや何れ  
 小紋せ此場よ  
 りろ面會せ  
 ぬも捨し  
 運と天一任  
 せの雨去き  
 よわいなーと  
 思ひ波め  
 下女小對ひ



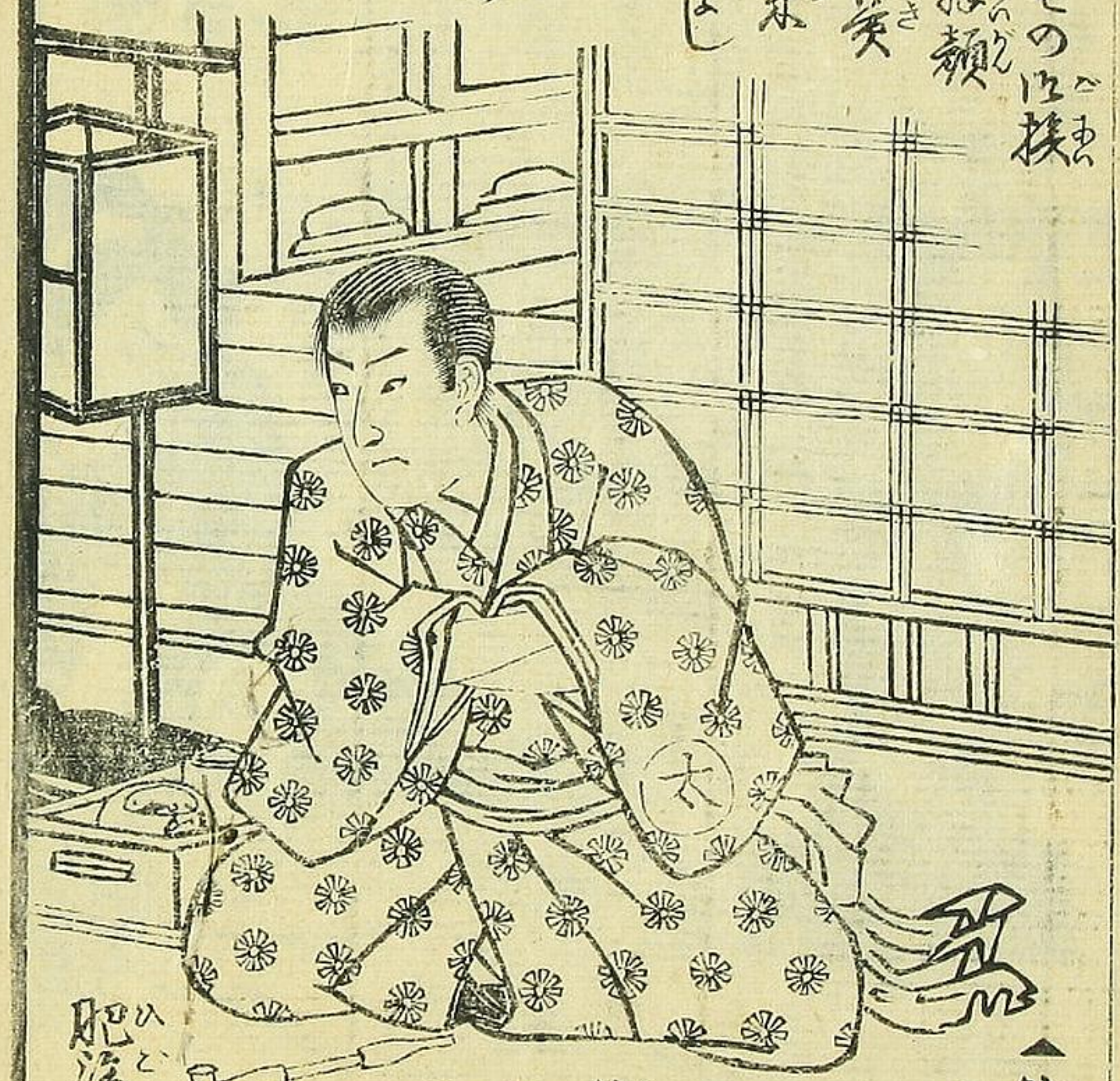
▲美心  
 羽衣の  
 黒髪結子  
 腰巻子  
 扇意の籠  
 鏡もよき  
 温和したる  
 結み西紋の  
 髪結いや胸  
 よ尖り鏡  
 刀どきまぐ  
 油取の

「而てその客ハ  
 何人あるを」  
 久島米の口家  
 申せと云ふ  
 先住「ウ、  
 變細水知ら  
 たり唯今を是へ  
 系正のさまと  
 へよと云つ  
 きてりてお  
 半願（是の  
 切死と覚悟よ



きん成態  
 老翁が  
 借取  
 一問  
 通  
 何れ  
 以用  
 の節  
 りろ  
 この中村よ  
 面會せんと  
 下女と

つきりつてのほけ  
撥いまごお頼  
ひさねど突  
敵いふるま  
の備るはし  
拙者へ肥  
後の山家  
春且中村  
六秀とふ  
武骨者  
の等の  
活用ふい



ひさねど突  
拙者へ  
久備米の  
藤士中七  
板垣を弟  
と申す者  
肥後の方と

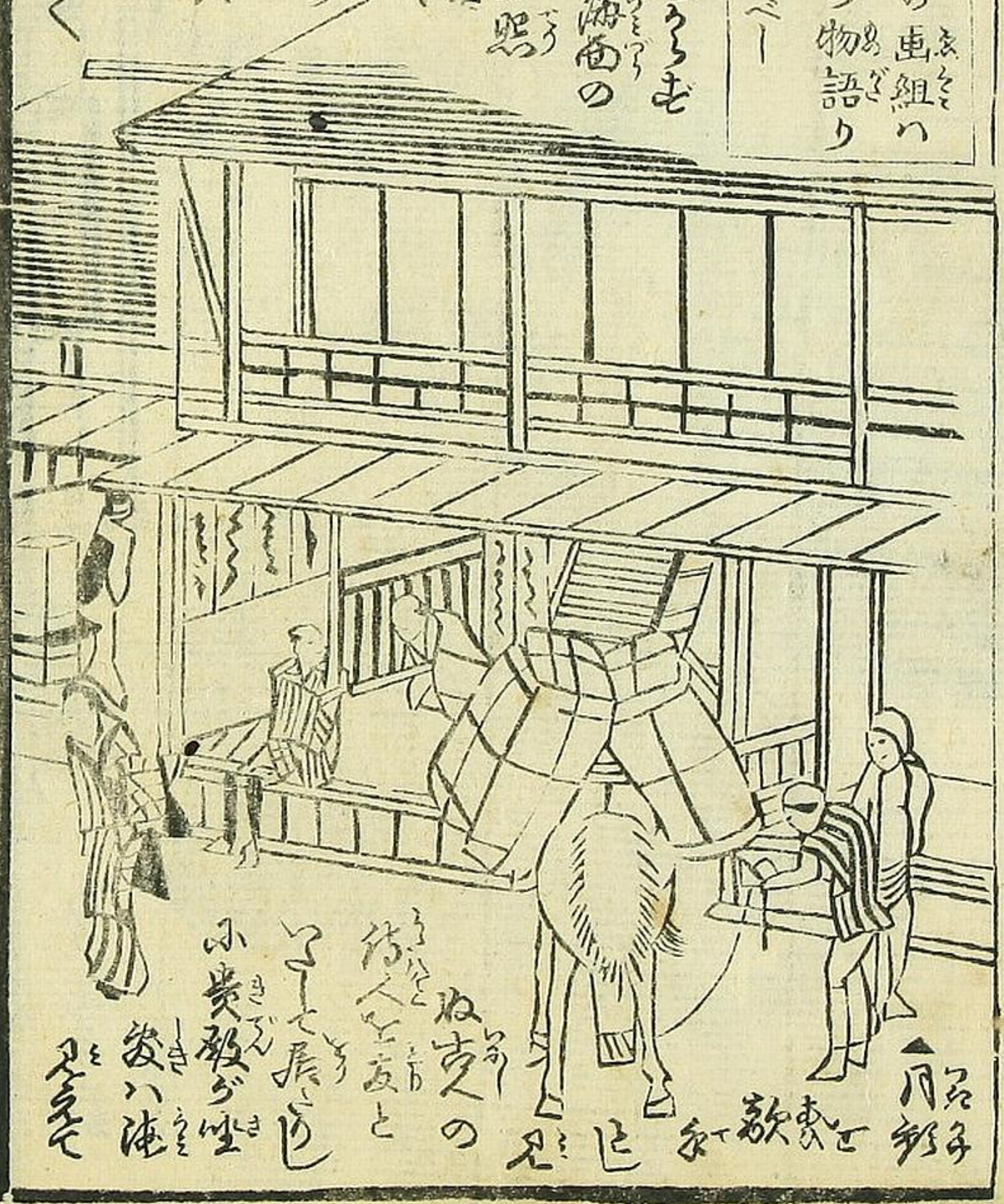
や拙者へ  
経世雅系  
せうと藤  
多た藤へ  
石系へ感  
上へ辨愛性  
名中名系  
しんか指さ中  
まゆ又殺あ  
是北振顔  
しん安眠  
と花さし



あじあぶ究  
ひさねど  
由り回  
の備るはし  
小振益

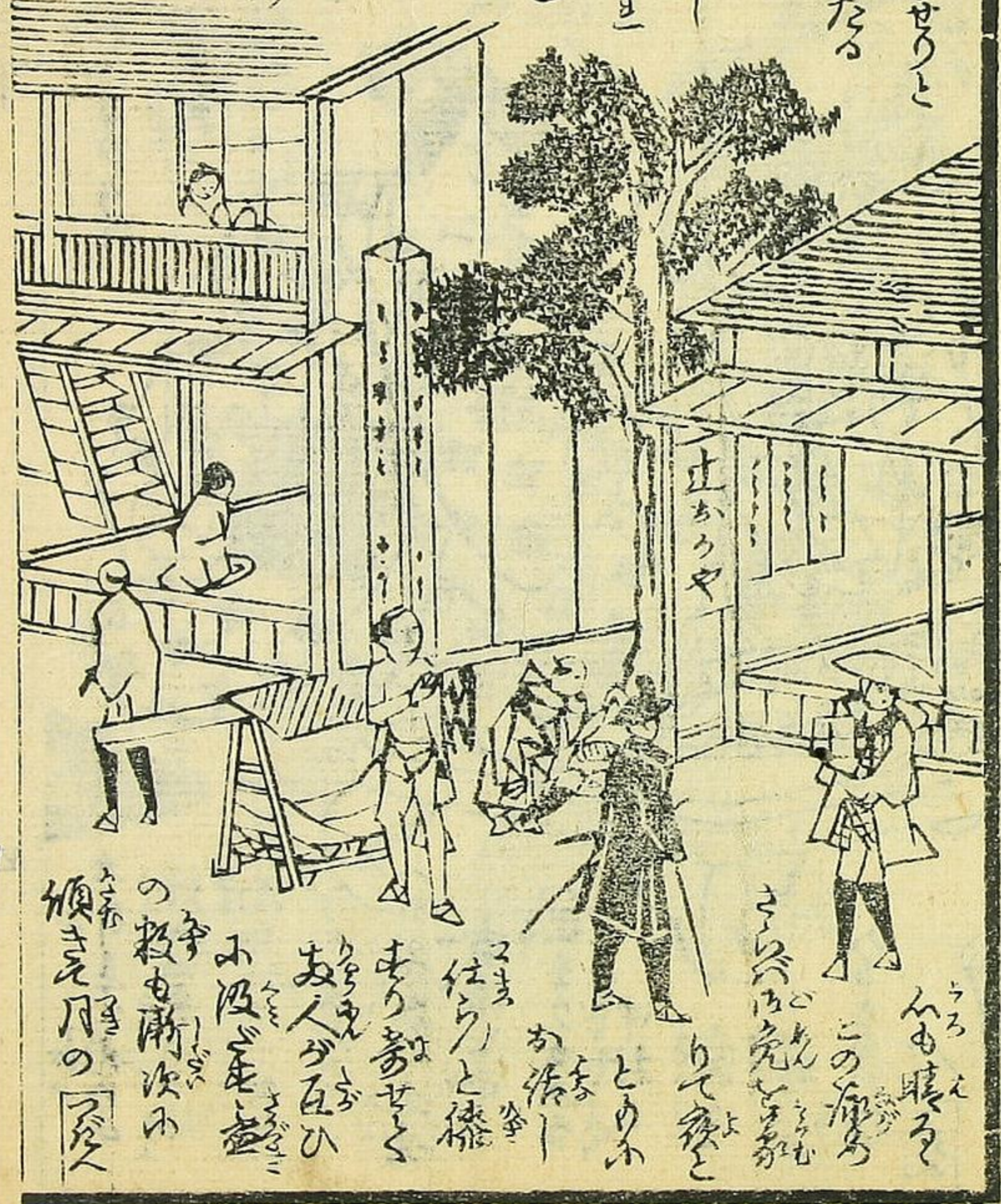
茲より以下の画組は  
中村六蔵の物語り  
と知り玉ふべし

つきかひろくま  
今宵はふた海面の  
浪も静ふ照  
日さすの月  
後小徳り  
尖の敵も雲  
よ面白ければ  
と道と前よ  
か物語りごとく



月形  
款  
見  
収束の  
侍人  
了て長  
小貴殿が  
後ハ池  
足

昔云々  
客らあそびたる  
板垣が海小  
此方いそし  
安堵し  
ハ追込  
けり  
昔も今宵  
ハ何とやら  
さすも  
一は  
の客



ふも  
この  
りて  
とゆふ  
お  
仕ら  
ま  
友人  
小  
の  
順

廣瀨三下



ついで 變る由おろぐりくる  
 そのまゝ 幸ひに小指  
 編むさうおた何と  
 十二中村氏  
 今宵 貴教  
 此のまゝ 入法  
 松崎のせしハ  
 此  
 小水  
 たるり

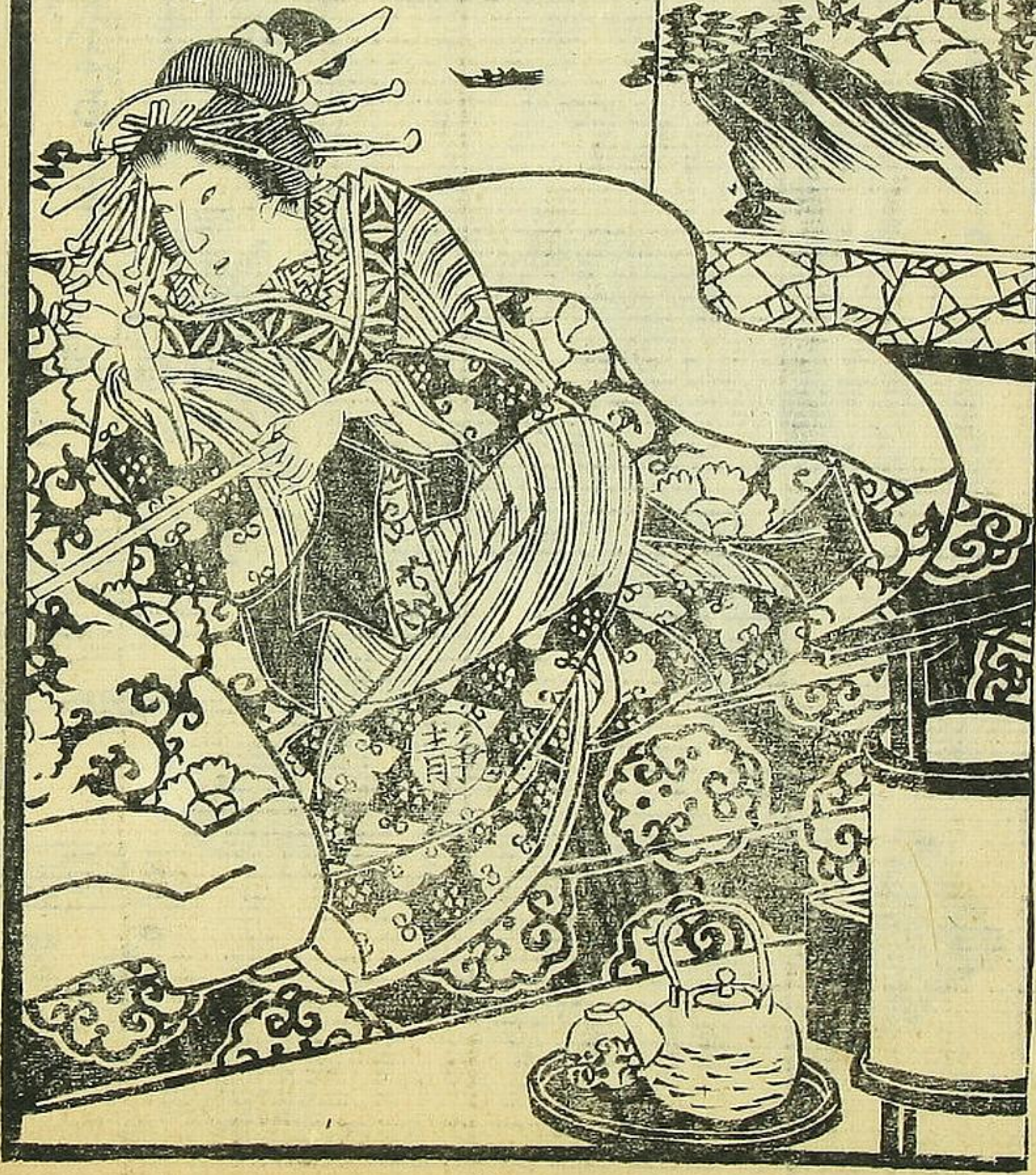
大外を死出  
 洋丸の幸ひ  
 高打の一發  
 くらきたなり  
 老翁の老翁  
 威儀と平  
 田まのあふる  
 中村氏  
 此のまゝ  
 此のまゝ  
 入るとの権  
 人  
 三下



そのまゝ 細い腰の衣あはらむ  
 まげ 松崎のせしハ  
 此のまゝ 入法  
 松崎のせしハ  
 つまむ 明せよとハ  
 此  
 小水  
 たるり

先へ死出  
 高打の一發  
 くらきたなり  
 老翁の老翁  
 威儀と平  
 田まのあふる  
 中村氏  
 此のまゝ  
 此のまゝ  
 入るとの権  
 人  
 三下

救助と名  
 不肖ながらも  
 板垣太舟翁  
 を忍びて  
 今日只今貴教  
 が今回の一大事  
 胞まで松者も  
 日意せうを直の  
 少の強敵見  
 我が故来の履歴  
 を解く貴教も



心底おあせ  
 拍落らよと  
 板垣いそゆ  
 牛身の生育  
 より忍び英化  
 を討つ頼末  
 目ハ開事と  
 東京要路の  
 顯官が勝教  
 さるる報知  
 と嘆き父と



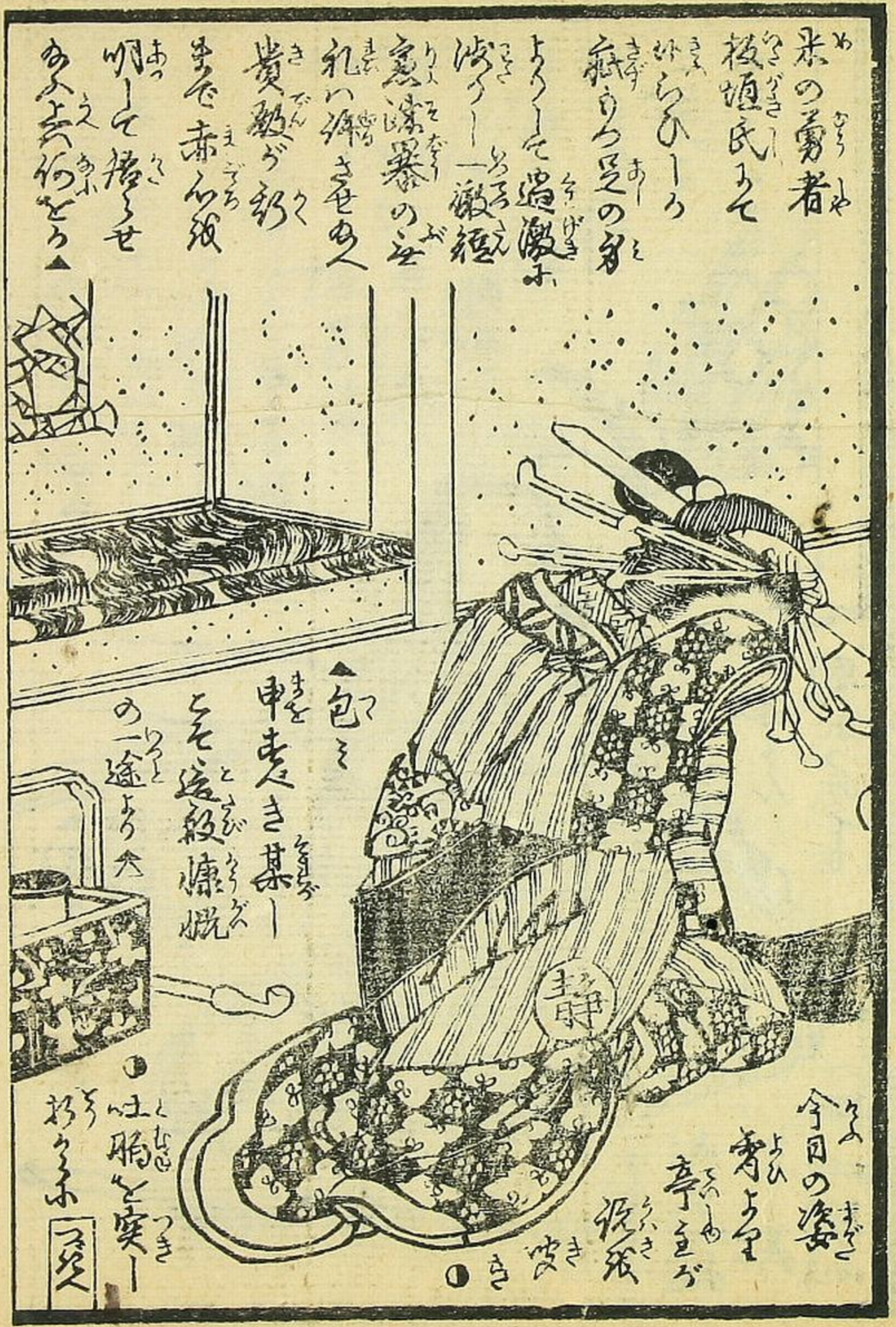
有志が  
 有るが  
 存と  
 縁  
 出  
 清國の  
 一  
 一





つき半  
と奉ふ  
決せん  
の光  
悟と  
具細小結  
る義士の勇  
勝大  
鈍んど感  
激一備ハ  
風同小言  
ろ一久留

六一と要路の貴  
影と晴殺か  
東系と通  
電せーが  
刺殺のまき  
九  
途のび  
たりとそす  
筋より嚴  
一と探偵  
身と容ろ  
地ふ迷ふる



米の勇者  
板垣氏も  
無ら足の方  
より一過激  
波一激極  
急激暴の  
礼の海さそ  
貴熱が初  
まを赤ら顔  
明一と格とせ  
あふ去何とら

今日の姿  
青より  
亭主が  
後張  
包  
申まき某  
とそ送般懐  
の一途より大  
吐胸を突  
おろふ



つき 是を對面せしむるは  
 貴教が逢えんと云ふは  
 幸なくもつらん流るる  
 と云ふ政教ゆゑも亦  
 知しるると思へばとの  
 場ふは方なくは起  
 ニツと決せし對面  
 貴教が底  
 明さすて力  
 と流るる

▲揚くは縁ども  
 今世は  
 金ふく  
 事や  
 是れは  
 大  
 氏を暗殺  
 其の  
 顔未



其れが  
 某が團家の  
 柱石

ありと伴  
 あり一  
 決せ  
 兎の  
 ようと

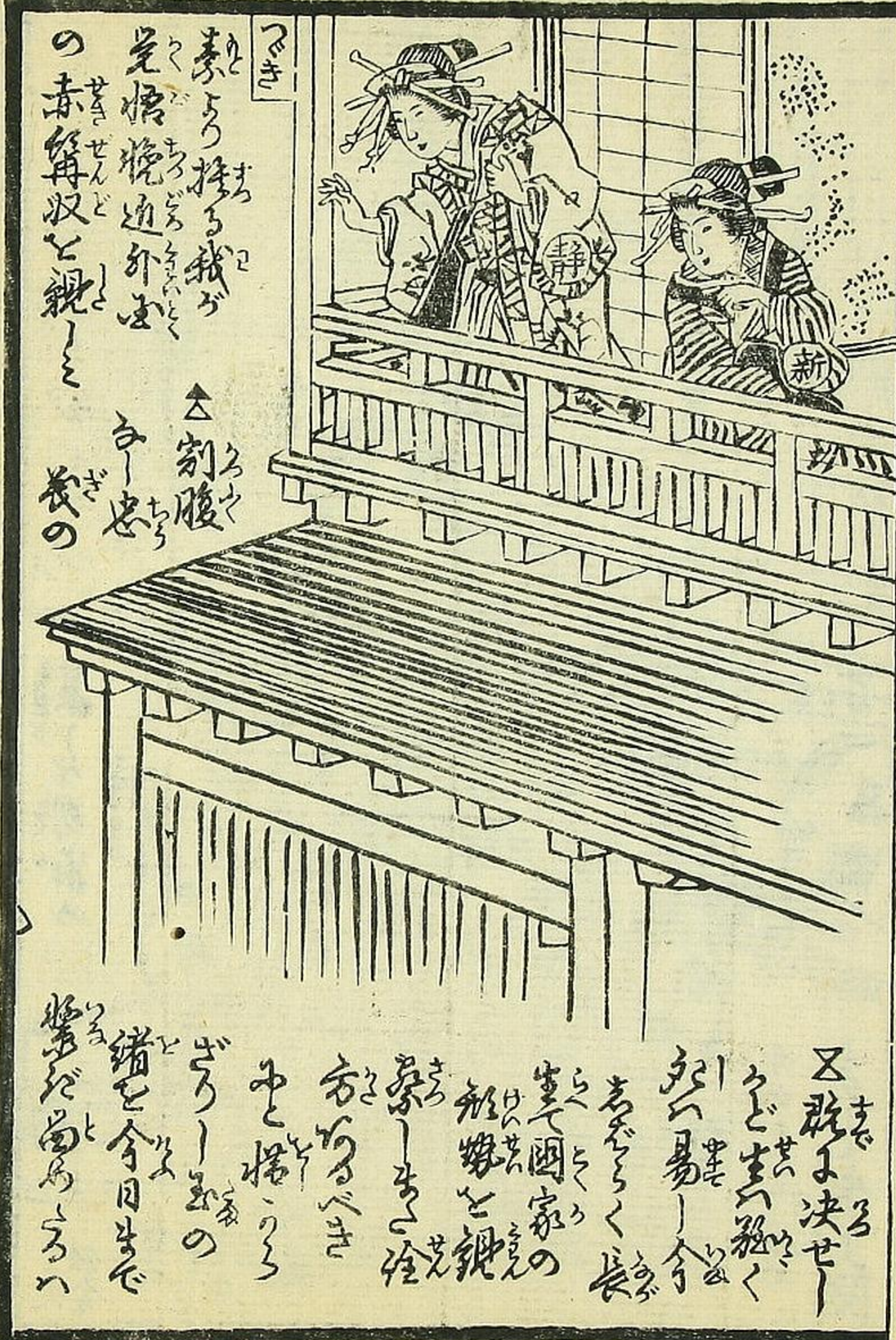


いとて神國の靈威  
と清きその系素の衣  
ふゆあそ知ら  
るかく廟堂  
二三の好段が  
偏重格を  
のたま知  
疾や所素  
の巨魁たる  
廣源系格を  
殺して各人が  
と見させ世運  
軌回せんものと

鬼とあり果んと  
うらハ

卑怯未練のゆふ  
子細の

▲多岐の  
素志の遂げ  
その場で成ふ  
ありと居ると  
同じを承へ  
中「去」を  
次へ



素より持る我が  
是悟曉近外  
の赤算収と親  
△割腹  
白忠  
長の

又此を決せ  
くを其の  
知易し  
あるく長  
其て國家の  
船場と親  
素しき  
方ありべき  
中を掃  
ざりし  
緒を今日まで  
繋だ尚あり

GANSHODO-SHOTEN  
KANDA TOKYO  
田神京東  
店書堂松巖

廣三

申村氏抄まを  
 政府の採領敷く  
 綱の中ある魚よ  
 身とりて此物傍  
 身で為延びし表の  
 運命をさるる物  
 外に得あつさう  
 安んずあめ肉ま  
 りと同一まそを  
 うち長延き落り  
 物る此の履歴

沼津の獨枝  
 静ふ深くも契  
 甲子より一萬  
 元と通じて一生を  
 以静かき地より  
 活代さるる活い  
 巻と書ゆて後を  
 死者附て去る枝  
 去るのと去るが面  
 去るるを年へ

三編と終り  
 相野村秋と出書  
 の新と初りあ  
 新編みかゝる  
 長物落りよ  
 へして不獲り  
 ことと休し  
 新ひとまらる  
 みるん

假名垣魯文校閱  
梅堂國政画圖

京文舎文京著述

官 朝鮮  
許 牛肉丸  
名 小色代

官 天泰丸  
許 小色代

文 地本問屋  
金堂 見社問屋

010190512091

